

## 作業的に豊かな環境を創る

高木 雅之

県立広島大学保健福祉学部作業療法学科

1990年代半ばから作業療法では理想の社会が議論されるようになり、作業的に丁度良い社会が提案された。作業的に丁度良い社会とは、すべての人が自分にとって社会にとっても意味のある作業を通して、その人自身も社会も成長していけるものである。これは私自身にとっての理想でもあり、この考えが現在の私の実践を方向づけている。本稿の目的は、誰もが意味のある作業ができる環境を創るために私が行ってきた実践を振り返り、そのプロセスと成果をまとめることである。ここでは、障害者入所施設における園芸とパソコン教室、地域におけるものづくりの3事例を示す。いずれの実践においても、当事者と共に作業を行うことで、人々は健康になり、作業が行われた施設や地域は作業的に豊かな環境へと変化していった。私たち一人一人が目の前の人と作業を始め、それを広げていくプロセスを通じて、作業的に丁度良い社会を創っていくことができる。

作業科学研究, 8, 15-23, 2014.

キーワード：作業的に丁度良い社会、園芸、パソコン、ものづくり

### The 18th Occupational Science Seminar, Educational Lecture

## Creating an occupationally rich environment

Masayuki TAKAGI

Department of Occupational Therapy, Prefectural University of Hiroshima

Social vision has been discussed in occupational therapy since the middle of the 1990s and the idea of an occupationally just society has emerged. In an ideal society, people can participate in meaningful occupation for them and society. Then both people and society can be developed through the occupation. This idea is also my vision and is directing my current practice. The aim of the article is to reflect my practice creating an environment where all people can engage in meaningful occupation and to explain the process and outcome of the practice. I show three cases of gardening and using computers in a facility for people with disabilities, and making crafts in a community. People became healthier and the facility and community changed to richer environments through each practice. The occupationally just society could come true by the process where each of us begins to do and expands occupation with people immediately around us.

Japanese Journal of Occupational Science, 8, 15-23, 2014.

Key words: occupationally just society, gardening, using computer, making craft

## はじめに

1990年代半ばから作業療法では理想の社会について議論されるようになった。Wilcock (1993) は作業を人間の基本的ニードであると捉え、Townsend (1993) は作業療法における社会的理想を描き、作業的公正 (occupational justice) の概念を発展させてきた。そして現在では、作業療法士がめざす理想の社会として、作業的に丁度良い社会 (occupationally just society) が提案されている。

本稿では、作業的に丁度良い社会を実現するために私が行ってきた実践を振り返り、そのプロセスと成果をまとめたい。

## 作業的に丁度良い社会

Stadnyk ら (2009) や Wilcock ら (2014) の文献から、作業的に丁度良い社会には、3つの特徴があると考えられる。1つ目は、その社会ではすべての人が意味のある作業ができるということである。2つ目の特徴は、作業をすることで人が健康になれる、成長できる社会であるということである。3つ目は、作業をすることで地域が発展するということである。つまり、作業的に丁度良い社会とは、作業を通してすべての人と地域が良い状態になれるものと言える。

作業的に丁度良い社会における作業への参加、人、地域の特徴とそれらの関係を考える (図1)。作業的に丁度良い社会では、誰もが潜在力を発揮し、どの作業をどのように行うかを選択し、必要なサポートを得て、作業に参加できる。そして、すべての人が社会に貢献し、満足を得られる。その結果、人はなりたい自分になり (being)、人生を通じて成長し (becoming)、社会や周囲からも価値を認められ、社会にしっかりと所属するようになる

(belonging)。地域では、作業への参加の重要性が理解され、個人や地域の多様性が認められ、強みに焦点が当てられるようになる。作業の機会、作業への参加を容易にする資源が、地域の中に充実する。そして、人と地域が良い状態になることで、さらに作業への参加が促進される。

対照的に、理想から遠い社会では、人々は自分ではコントロールできない外的要因によって意味のある作業に参加できなかったり (作業剥奪)、意味や目的を感じられない作業に参加せざるを得なかったり (作業疎外)、社会的に価値のある作業に参加できなかったり (作業周縁化)、行うべき作業が過剰にあったり、足りなかったりすること (作業不均衡) を経験する (Stadnyk ら, 2009, 吉川, 2008)。その結果、人は健康を害したり、社会的に価値の低い存在であるとみなされたりする。地域では、

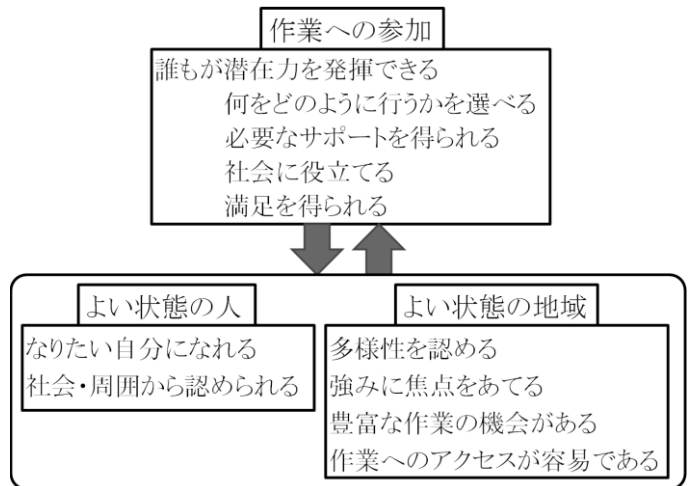


図1 作業的に丁度良い社会

経済や健康の格差が広がり、スラム化が起こり、自殺や犯罪が増える。つまり、作業的に不公正な社会では、一部の人々だけに特権が与えられ、残りの人々は意味のある作業を十分に行えず、人々も地域も悪い状態になり、一層作業に参加できない状況が創り上げられていく。

人々がどの作業にどのように参加できるかを左右する要因には、構造要因と背景要因がある (Stadnyk 他, 2009, Polatajko 他, 2007)。構造要因は、作業を決定づける基盤と作業の手段・プログラムの2つのレベルに分けられる。作業を決定づける基盤となるのは、経済のタイプ、国や地域の政策、人々の価値観などである。これらが基盤となって、その社会ではどの作業に価値が置かれ、どのように行われるべきであるかが決まる。作業の手段・プログラムには、人々が実際に作業を行う際に利用する施設、サービス、交通機関などが含まれる。基盤に合った作業に関しては、必要な設備やシステムが整えられ、人々が利用できる手段・プログラムが充実し、作業への参加が促進される。一方で、基盤に合わない作業については、必要な作業の手段・プログラムが整わず、人々はその作業に参加しづらい状況となる。

背景要因は、個人や集団がもつ特性であり、年齢、性別、能力・障害、民族、住む地域、所有財産などが含まれる。構造要因と背景要因との関係によって、作業への参加が促進されたり疎外されたりする。例えば、人種差別が肯定される政策や価値観のある国において、差別の対象となる人種の住民が働こうとした場合、希望に合った求人がなかったり、就職を支援するサービスを受けられなかったりする。その結果、その人は経済的・社会的に価値の低い、重労働の仕事にしか就くことができないといったことが起こる。

誰もが意味のある作業に参加できるようにするために

は、構造要因を変えていく必要がある。そのための方法として、Wilcock（2006）は当事者と共に地域で活動し、その成果を通じて住民への啓発や行政との交渉を行い、活動を展開させていくというアクション・リサーチを提案している。また Whiteford ら（2011）は、作業的に丁度良い社会を築く実践を導くための枠組みとして、Participatory Occupational Justice Framework（POJF2010）を考案している。枠組みの中には、パートナーと協働する、計画を調整する、資金を得る戦略を練る、計画の実施と評価をサポートする、継続あるいは終了を代弁する、作業的不公正について啓発する、という6つのプロセスが含まれている。つまり、作業的不公正を経験している人々と協働し、行動を計画・実施し、成果を評価し、広めていくプロセスによって、構造要因を変化させることができる可能性がある。

### 実践例

これまでに私が作業的に丁度良い環境を創るためにやってきた3つの実践を紹介する。

#### （1）障害者入所施設における園芸

2004年6月、私（以下、作業療法士）は身体障害者施設入所者と共に園芸を始めた。園芸を始めたきっかけは、カナダ作業遂行測定（以下、COPM）を行った結果、園芸をしたいという入所者が1名おり、工夫をすれば多くの入所者が園芸を楽しめると考えたためであった。園芸の参加者を募り、5名が集まった。始めは、育てたい植物を決め、一人一つのプランターに種を蒔いた（図2）。

まず作業療法士が行ったことは、参加者が水やりをできるようにすることであった。参加者は全員車いすに乗っており、現状の芝生に埋め込まれた蛇口とホースリールでは水やりを行うことが困難であった。そこで、作業療法士は、水を入れたペットボトルを台の上に置くようにした。その結果、参加者はペットボトルの水をじょうろに移して、自分で水やりができるようになった。

次に、参加者と共に園芸を他の作業とつなげていった。参加者は、咲いた花を押し花にしたり、植物の写真を撮って飾ったり、成った野菜を料理して他者に振る舞ったりした。作品を目にしたり、料理を口にしたりした人たちは、日ごろから参加者と園芸の話をするようになった。園芸が押し花・写真撮影・料理といった作業に広がった結果、園芸を他の利用者や職員にアピールすることができた。

多くの人が施設で行われている園芸を知るようになり、自分もやってみたいという入所者が増え、参加者は13名になった。作業療法士の提案で始めた園芸であったが、次第に参加者が積極的に参加するようになった。参加者



図2 園芸開始当初（2004年6月）



図3 ハート型の花壇の完成（2005年5月）

は自ら「次はあれを植えたい」、「あれとこれを一度に育てたい」と言って次々育て、栽培した植物は10種類を越え、プランターは22個に増えた。また、ある参加者から「プランターだけではつまらないから花壇を作ろう」という提案があり、作業療法士が施設管理者に相談し、花壇を作ることになった。花壇の形・大きさ・位置は参加者が考え、2005年5月にハート型の花壇が完成した（図3）。

参加者も育てる場所も増え、園芸の規模が拡大し、一層他者の目につくようになり、作業療法士と入所者以外にも園芸に参加するようになった。まず近隣の住民が参加者に、「きれいな花が咲いたね」、「大きくなったね」と声をかけるようになった。「こうやったらよく育つ」、「この肥料を使うといい」といった育て方のアドバイスをくれる住民まで現れた。また参加者の家族が来訪時に種や苗を持ってきて、参加者と一緒に植えたり、草取りや収穫をするようになった。ある参加者は、「孫が遊びに来て、緑のトマトまで全部採られてしまう」と笑顔で話した。



図4 花壇に咲いたチューリップを伝える新聞記事  
(2008年8月 療護施設聖恵会報第2号より)

施設管理者からは、車いすでも近づける高さのある大きな花壇を作ろうとの提案が持ち上がった。さらに施設管理者は介護業務を調整して、介護職員と一緒に園芸に参加できる流れを作った。参加者と介護職員と作業療法士が協力して、花壇の素材や形を検討し、草取りや土作りを行い、2007年10月に花壇を完成させた。そして翌年の春には、花壇いっぱいチューリップが咲いた(図4)。

## (2) 障害者入所施設におけるパソコン教室

入所者に対してCOPMを行った結果、パソコンを始めたい、パソコンがもっと上手になりたいという希望が多かったため、パソコン教室を開催した(高木他, 2008)。

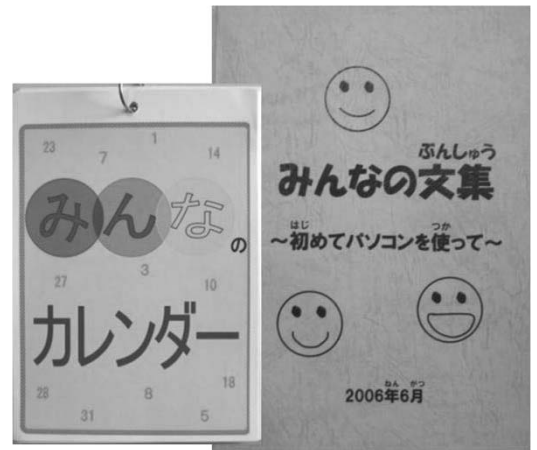


図5 作成した文集と日めくりカレンダー

パソコン教室は週1回90分で、2006年2月から5月までの4カ月間にシリーズで計15回実施された。集まった参加者は38名で、パソコン初心者のための初級グループ20名と経験者の中級グループ18名に分けられた。初級グループの参加者は、パソコンの電源操作、文字入力や保存を中心としたワープロソフト操作を学んだ。中級グループでは、文字の装飾、絵や写真の挿入を含むワープロソフト操作が学習された。

参加者の中には、身体障害のために標準のマウスやキーボードを操作することが困難な者がいた。そのため、作業療法士はアクセシビリティ機能を用いてパソコンを使いやすいように設定したり、トラックボールなどの機器を活用した。また漢字が読めなかったり、

通常のパソコンテキストでは説明が理解できない参加者がいたため、作業療法士は独自のテキストを作成した。自分のパソコンを持っていない参加者でも繰り返し練習ができるように、施設にパソコンコーナーを設置した。毎回の教室終了時には、復習となる課題を出して、知識の定着を図った。これらの工夫により、参加者はワープロソフトの操作ができるようになった。

学習した機能を使って参加者全員で作品を作ることになり、初級グループでは文集を、中級グループでは日めくりカレンダーを作成した(図5)。さらに参加者は自ら家族に手紙を書いたり、カレンダーや家計簿を作ったりして、パソコンを媒介とした作業を上げていった。パソコンを買うお金を貯めるために禁煙を始める参加者やパソコンをするために早起きをする者も現れた。作品を目にした他の職員は、「カレンダーを売ってほしい」、「こん

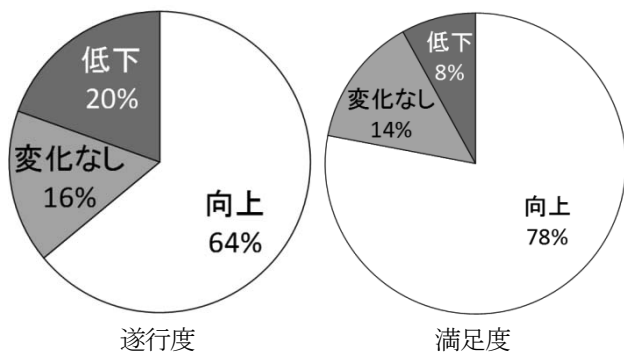


図6 COPMの遂行度の変化満足度の変化

なにできるとは思わなかった」と、改めて参加者の能力に気づき、参加者に対する評価を向上させた。職員は参加者がパソコンをすることの価値を一層認めるようになり、パソコン教室終了後も継続してパソコンコーナーを設置しておくことができるようになった。さらに職員は参加者と一緒に施設の新聞を作ることを提案した。参加者たちは学習したパソコンの技能をいかして、園芸の取り組みなどを紹介する新聞を完成させた(図4)。

パソコン教室の前後でCOPMの得点を比較した結果、パソコンの遂行度は64%の参加者で向上し、満足度は78%の参加者で向上した(図6)。SF-8においては、すべての項目の平均値がパソコン教室前より後のほうが高くなった(図7)。これらの結果から、参加者はパソコン教室に参加したことにより、パソコンを上手に満足して行えるようになり、健康になったことが明らかとなった。

### (3) 地域におけるものづくり

私は、2009年にオーストラリア政府からエンデバー奨学金を得て、オーストラリア作業科学センター

(Australasian Occupational Science Centre)にて研修を行った(高木, 2010)。研修の一部として、オーストラリア全土に広まっているメンズ・シェド・プログラムに参加した。メンズ・シェドとは、男性たちの物置小屋を意味し、地域在住の男性たちが集まってものづくりを行う作業場である。地域の協会やNPOが、国や地方から資金を得て運営している。年齢・性別問わず住民誰もがプログラムに参加することができる。

私は、ベリーという地方のメンズ・シェドに参加した。参加者は主に退職後の男性で、週に2回、15名程度の参加者が集まって、木工を行っていた。参加者は自分に必要なものや地域の人々、施設から依頼があったもの(例えば、木のおもちゃ、学校で使うイーゼル)を製作・修理していた。参加者は木工を通して、地域に貢献し、自身の健康を保っていた。

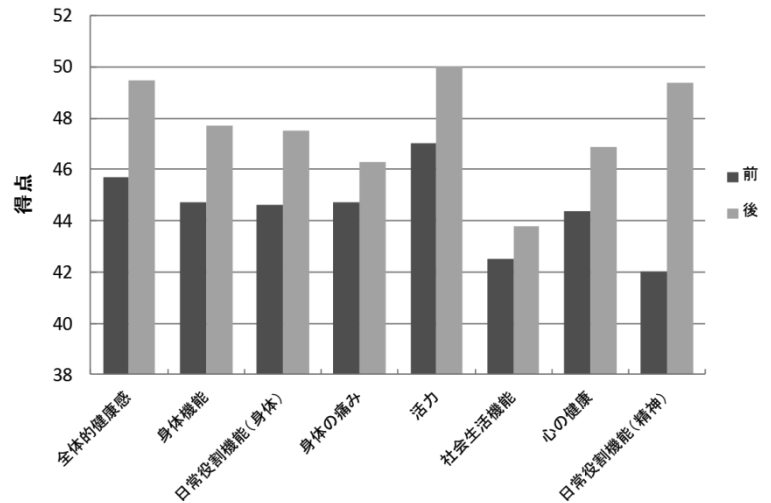


図7 パソコン教室前後のSF-8の平均得点

帰国後、私は日本でも似たような取り組みを行いたいと考えた。まず、ものづくりを一緒に行う仲間を見つけるために、勤務している大学で「ものづくりと健康づくり」と題した公開講座を開催した(高木他, 2013)。講座は2012年8月から10月の間に、2週間に1回90分、計5回実施された。講座終了後、受講者10名とグループを作り、大学でのものづくりを継続した。さらに、大学祭での作品の展示・販売、夏休みの子どもの工作支援、大学における授業への協力をを行い、活動を広げていった。

参加者の口コミ、公開講座や大学祭での勧誘によって、参加者数は増加していった。2013年1月に13名であった参加者は、2014年11月現在では約3倍の36名となっている(図8)。50~60代の女性が参加者全体の約半数を占めているが、学生や子連れの主婦、退職後の男性、80代の高齢者、障害のある方も参加しており、参加者は多様である。

参加者の増加に伴い、新しいメンバーが得意とするものや興味があるものが加わり、行われるものづくりの種類も多様化していった。2013年1月時点では、陶芸、籐細工、木工、木彫、折り紙のみが行われていたが、現在までにエコクラフト、編物、裁縫、絵画、革細工、マクラメ、コサージュづくり、布ぞうり、パソコン、とんぼ玉が加わった。活動が増えたことで、より多くの住民にとって魅力的な場となり、さらに参加者が増えていっている。

2014年4月に、正式にものづくり工房作ら(さくら)を発足させた。作らの目的は、ものを作りたい誰もがものづくりを楽しめる場をつくること、参加者がものづくりを通して成長し、地域に貢献することを促進することである。参加者は、県立広島大学にて2週間に1回2時

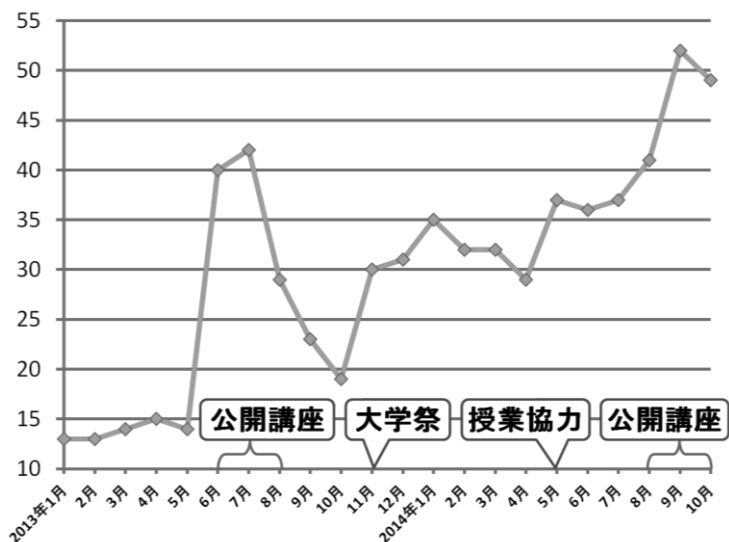


図8 参加者数の推移

間のものづくりを行っている(図9)。作らには、誰でも参加できる、何でも作れる、参加者同士学び合う、作って次につなげる、という4つの特徴がある。これらの工夫により、多様な住民が参加でき、一人ひとりが対等な立場でものづくりを楽しみ、地域に貢献できるようになっている。

参加者は、作らでのものづくりを通して、健康になったり、成長できると語っている。例えば、パーキンソン病をもつ50代の女性は、「(作らに参加して)自分から何かしようっていう気にすごくなってきた。今までは暇があったら寝ようとか、テレビ見てぼっとした時間が多かったけど・・・やろうっていう気持ちが出てきた。心が明るくなったよね。前向きっていうのかしら。またここに来て、あの人に会いたいとか。」と話した。また退職後に作らで陶芸をするようになった60代の男性は、「会社を辞めちゃうと、自分から何かやらないと成長が止まってしまうなあと思って、ここに入った・・・新しいものを自分で作るということで、もう一度自己成長できるんじゃないのかなあと思って・・・粘土でお皿とかカップとか作るんだけど、思うような形になるときも、うまくいかないときも、全部自分のやる気なり、自分のチャレンジになるというのがおもしろい。」と語った。

参加者は作らで作ったものや習得した技能を自宅や地域で活かしている。参加者の中には、自宅でもものづくりをするようになったり、できるようになったものづくりを地域のサロンで教えたり、作品を市美展に出品するようになった者もある。前述した男性は、「スーパーの食器売り場に立ち寄って、どんな作品がお店で売られてるのかなあとか、自分が作ったやつとその辺のを見比べて、



図9 作らでのものづくりの様子



図10 本町でのものづくりの様子

こういうアイデアを取り込んだらいいんじゃないのかなあとか思ったり。今までは素通りしてた陶器売場を、そういう前向きな気持ちでいろんな商品を見るようになった。」と語った。仕事をしながら作らに参加している60代の女性は、「この前、トートバックを作って、友達に送ってあげたの、誕生日にね。初めて作ったバックだったから、ちょっとミスもあったけど、その友達からすごい喜んだメールが来たからね。それ見たときにこっちが嬉しくなったの。友達が『手作りをもらおうと思わなかった』とか言ってね、すごい喜んでくれたから、そのメールがすごく私は嬉しかった。」と話した。

2014年10月からは、ものづくりを楽しめる場所を大学外に増やすために、三原市本町のサロンにおいてもものづくり教室を開始した。本町はJR三原駅のすぐ北側に位置し、三原市の中心市街地として賑わっていたが、現在は閉店した商店が増え、少子高齢化が進んでいる地域であ

表1 当事者と共に作業をする効果

レベル	変化	園芸・パソコン教室の具体例	ものづくりの具体例
個人	健康になる, 成長する	SF-8 の得点が向上した 禁煙など健康的な生活習慣になった	参加者が成長や健康への影響について語った
	作業技能が向上する	COPM の得点が向上した 一人で水やり・パソコン操作ができるようになった	売れるものを作れるようになった 他者に教えられるようになった
	個人での活動が広がる	パソコンで家計簿・カレンダー・手紙を作成するようになった 育てた野菜を料理したり, 花の写真を撮ったり, 押し花をするようになった	美術展に出品したり, 他者に教えたり, 自宅でものづくりをするようになった
集団	参加者数が増加・多様化する	園芸の参加者が増加した	ものづくりグループへの参加者が増加した 学生や子連れの主婦が参加するようになった
	集団での活動が広がる	いろいろな種類の植物を育てるようになった 花壇で植物を育てるようになった パソコンで施設の広報紙を作るようになった	行われるものづくりの種目が増加した 大学祭での展示・販売, 子どものための工作教室を行うようになった
施設 地域	物理的資源が充実する	施設に花壇やパソコンコーナーができた	地域にもものづくりができる場所が増えた
	周囲の理解・協力が高まる	職員が参加者の能力を認めるようになった 地域住民や職員が園芸に協力するようになった	大学の職員や市から連携の依頼がくるようになった
	作業を支援するシステムが構築される	園芸を支援できる業務の流れが変わった 施設が園芸をする費用を負担するようになった	ものづくり教室が市の介護予防事業の一環に組み込まれるようになった
	行事・活動が活性化する	施設の文化祭においてパソコンを使った作品展示が増えた	大学祭の模擬店, 地域のサロンの活動, 美術展が活性化した

る。自治会やサロンの役員の呼びかけにより、10名の住民がサロンに集まり、エコクラフト、陶芸、革細工、布ぞうりを楽しんでいる（図10）。

作らのメンバーの一人が、三原市高齢者福祉課の職員に自分たちの取り組みをアピールし、職員が活動に興味を示すようになった。そして、市の介護予防事業の一環としてもものづくり教室を開催することが決まり、現在その準備を作らのメンバーと市職員が一緒に行っている。

#### 当事者と共に行う作業の効果

前述した3つの事例は、施設の入所者や地域の住民と共に作業を行うことによって、彼ら自身もその周りの環境も良い状態になっていくことを示している。ここでは、事例においてみられた変化を、個人、集団、施設・地域の3レベルに分けて整理する（表1）。

まず個人レベルとしては、健康になる、成長する、作業技能が向上する、個人での活動が広がる、という変化があった。園芸やパソコン、ものづくりをすることによって、人は健康になり、成長でき、その作業をうまくできるようになった。また参加者は個人的に、パソコンでいろいろなものを作ることになったり、ものづくりでできたものを出品することになった。

集団レベルとしては、集団での活動が広がる、参加者数が増加・多様化する、といった変化がみられた。ものづくりの種類や園芸で育てる品種が多様化したり、作品の展示・販売や新聞作りといった活動が行われようになり、作業をする場所が増え、集団としての活動が広がっていった。活動が拡大することで魅力が増し、グループに参加する者も増え、多様になった。

施設・地域レベルにおいては、周囲の理解・協力が高



まる、作業を支援するシステムが構築される、物理的資源が充実する、行事・活動が活性化する、といった効果があった。周囲の人々は、参加者が作業する様子や成果を目にして、作業の重要性や参加者の能力を認めるようになり、個人が作業に参加しやすいシステムが施設や地域にできた。そして周囲の人々は、作業への参加を支援するようになり、施設や地域には、作業するために必要な道具、設備、場所が整えられていった。参加者個人やグループが獲得した技能や作ったものをいかして、地域の行事や活動に参加していくことで、地域も活性化した。

### 作業的に丁度良い社会を創るには

私はこれまでの経験から、誰もが自分の作業ができる環境を創っていくポイントを次のように考える。

#### (1) やってみる

私たちの周りには明確な作業ニーズを持つ人もいれば、一見ニーズを持っていないようにみえる人もいる。周囲の人々と作業を始めてみると、その人たちから次々とやりたいことが出てきたり、他者もその作業に興味を持ち始めたりすることがある。作業をすることで、人々に新たな夢や希望が生まれるのである。私にとって、作業ニーズは見つけるものというより、共に創り出すものである。その人、その地域に新たな夢や希望を生む作業になるかは、やってみるまでわからない。だからこそ、やってみることが大切である。

#### (2) できるようにする

作業を通してポジティブな経験をすることで、人々はその作業により一層結びつき、その作業を通して将来を展望するようになる。私たちは、人が作業を通してより良い経験ができるように支援ができる。例えば、作業を自立して効率よく行えるようにしたり、適度な挑戦となるようにしたり、成果を明確にして、人が満足を得られるようにできる。そうすることで、人は作業との結びつきを強め、より積極的に参加するようになる。

#### (3) 作業を広げる

作業の規模が拡大すると、多くの人々の目に触れるようになり、新たな参加者が増え、さらに作業が広がっていくという好循環が生まれる。こじんまりと始めた作業でも、その作業を発展させたり、関連する他の作業に結びつけたりすることで、作業をする場所や仲間を増やし、規模を拡大することができる。

#### (4) アピールする

作業の魅力をうまくアピールすることで、作業する仲間を増やしたり、他者の協力を得ることができる。何を魅力的に感じるかは、人や立場によって異なる。ある人

は、作業に没頭している様子や作業中の笑顔・言葉、洗練された作品に惹きつけられるかもしれない。別の人は、健康増進、認知症予防といったキーワードや健康の度合いを示す数値の変化に興味を示すかもしれない。誰に情報を伝えたいかによって、伝達手段も変わってくる。新聞や市の広報誌の記事は、多くの住民の目に留まる。権力をもつ相手と直接会って話すことで、支援を得られることもある。効果的な方法で、多くの人々に行っている作業の魅力を伝え、参加者・協力者として作業に巻き込んでいく工夫が必要である。

#### (5) 多様性・社会性・協働性のあるプログラムを築く

多様性を基盤とした社会に貢献するプログラムを参加者と共に創り上げていくプロセスによって、作業は地域に広まっていく。作業に対する希望や満足する作業の仕方は、一人一人異なる。多様な人々が参加し満足できるためには、集団の中で行われる作業の形態が過度に限定されないように注意しなければならない。

自分だけではなく他者にとっても役に立つ作業ができることで、人はより健康になれる可能性がある。さらに他者や地域にもメリットがある作業である場合、他者からの理解や協力が得られやすい。社会性のあるプログラムを築くことで、その効果は大きくなり、アピールしやすくなる。

参加者全員が同じ方向を向いて進んでいくには、目標を共有する必要がある。目標を定め、それに到達するための行動計画を立て実行し、その効果を明らかにしていくプロセスを、参加者が協力して進めていくことができれば、作業は発展し続けていく。

### おわりに

私たち作業療法士は、作業的に丁度良い社会を創るリーダーになれる。すべての人が、自分にとっても社会にとっても意味のある作業を行うことで、良い人と社会が創り上げられる。私たち一人一人が目の前の人と作業を始めたとき、きっとそこは作業的に豊かな環境へと変わっていくだろう。

### 文献

- Polatajko, H. J., Molke, D., Baptiste, S., Doble, S., Santha, J. C., et al. (吉川ひろみ・訳) (2011). 作業科学: 作業療法の必須要件. In Townsend, E. A. & Polatajko, H. J. (Eds.) (吉川ひろみ, 吉野英子・監訳), *続・作業療法の視点: 作業を通しての健康と公正* 大学教育出版, pp.90-113.
- Stadnyk, R. L., Townsend, E. A. & Wilcock, A. A. (2009). Occupational justice. In Townsend, E. A. & Christiansen, C.



- H. (Eds), *Introduction to Occupation: the Art and Science of Living 2nd ed.* Upper Saddle River, NJ, Pearson, pp.329-358.
- 高木雅之 (2010). オーストララジアン作業科学センター研究報告. *作業科学研究*, 4, 45-47.
- 高木雅之, 吉川ひろみ (2008). 身体障害者施設入所者に対するパソコンを使用したプログラムが作業遂行及び健康感に与える効果. *作業療法*, 27, 522-532.
- 高木雅之, 吉川ひろみ, 古山千佳子 (2013). 地域住民に対するものづくり講座—ものづくりを通して健康になれる地域を目指して—. *作業科学研究*, 7, 19-26.
- Townsend, T. (1993). Occupational therapy's social vision. *Canadian Journal of Occupational Therapy*, 60, 174-184.
- Whiteford, G. & Townsend, E. (2011). Participatory Occupational Justice Framework (POJF2010): Enabling occupational participation and inclusion. In Kronenberg, F., Pollard, N. & Sakellariou, D. (Eds.), *Occupational Therapies Without Borders Vol.2. Towards an ecology of occupation-based practices*. Churchill Livingstone Elsevier, Philadelphia, pp.65-84.
- Wilcock, A. A. (1993). A theory of the human need for occupation. *Journal of Occupational Science: Australia*, 1, 17-24.
- Wilcock, A. A. (2006). *An Occupational Perspective of Health 2nd ed.* Slack, Thorofare.
- Wilcock, A. A. & Townsend, E. A. (2014). Occupational justice. In Boyt Schell, B. A., Gillen, G. & Scaffa, M. E. (Eds.), *Willard & Spackman's occupational therapy 12th ed.* Lippincott Williams & Wilkins, Philadelphia, pp.541-552.
- 吉川ひろみ (2008). 「作業」って何だろう. 医歯薬出版.